

第II部 古文書調査の方法－木村家における調査を例に－

調査に至る経過

竹中 友里代

平成20年(2008)夏頃ふるさと学習館に地元の旧家から古文書の相談をうけた。老人憩いの家「八寿園」で知人から、ふるさと学習館では古文書などを扱えると聞いてやってきたという故木村富彦氏であった。代々八幡に住み、古文書が家の土蔵などに伝来している。その史料を利用して大学生のお孫さんが自家の歴史のレポート論文を作成しているが、よめない文字が多く、これら史料をどう扱つたら良いかというものであった。お孫さんを伴い、油屋を営んでいた記録類や系図を学習館に持参され、そこではわかる範囲でお応えした。

またこの時土蔵に大量の古文書があり、これをどのように整理したらよいかと相談を受ける。一部取り出したものについては、研究していただきて差し支えないが、保管されている状態、つまり現状を記録することが重要である。八幡市教育委員会として古文書調査をさせていただけるなら、手つかずの状態で蔵出しから調査を行うことに意味があるので、掃除や収納物の移動をせずに、その状態のままで一度拝見させてほしい旨お願いする。

平成20年(2008)12月末に自宅を訪問し、古文書の一部と土蔵を拝見させて頂いた。

木村家は、男山山下の放生川に掛かる安居橋の東、常磐大路の西に面した、八幡市八幡山柴に所在する。屋敷地は広く奥行きがあり、石清水八幡宮社家の田中家屋敷に接し、山下門前町の中心的な位置にある。以前油屋を営んでいた頃は、町内各所に土蔵や作業場所などの敷地がいくつか存在していた。居宅の南隣りで昭和40年代頃まで、ガソリンスタンドを営んでおられた。家屋は、外観は改装されていたが、内部は思いのほか古い町家の構造を残していた。四ツ間取りで、奥の座敷は天袋付棚に、一間幅の畳床、東に付書院を設け、この座敷の東側に縁をとる。植栽や石灯籠を配置した中庭を挟んで、東に今回調査対象となった土蔵に至る。通りに面した表の間口に対して、かなり奥行きがある。座敷の構造や衝立・屏風など旧家を伺わせる調度品が多く、玄関を入って時間を遡った感があった。

最初に拝見したのは、徳川家康領知朱印状(口絵3,4)・石清水八幡宮鉢座神人補任状・土地売買証文・油屋の経営出納簿などであった。そのうちの一箱には、土地売券状数百点が詰まっていた。八幡での家康朱印状の所在状況や補任状の説明を簡単にさせていただいた。

次に土蔵内を拝見する。一階北側壁面の棚に整理された帳簿類がまとまっており、ほかに木箱少なく述べとも十箱ほどに書籍・冠婚葬祭など家の歴史にかかる記録類が確認できた。

現状記録を含めた古文書調査の実地現場として、八幡市及び歴史研究を志す学生のまたとない貴重な機会で、ぜひ経験させていただきたいとお願いした。快諾いいいただき、調査体制を整え、再度日程

調整を約して辞した。

その後も数度にわたって来館され、持参された史料を拝見した。そのひとつに、「吾家史伝」があった。先々代の恒久氏が大正2年（1913）に書き記したもので、巻頭に恒久氏自身の「家内中なかのよいのがたから舟、こゝろやすやす世を渡るなり」「誠意一貫」「知足」と書されていた。幕末明治の混乱期に家伝の史料をほとんど失い、先祖の足跡が記せないと嘆く祖父の思いが記されている。残り少ない記録と記憶を基に書き綴られたこの「家伝」にいずれ自分もその続きを書きたいと漏らされていた。

また古文書をはじめ家に伝来するすべての史料が、個人の家の歴史にとどまらず、地域史の解明にかかわり、それはひいては市の文化財、文化遺産であると語られた。

このようなやりとりのなかで、調査目的について共通の認識を確認し合い、家に伝わる資料全体を調査することにご同意いただいた。

平成21年（2009）5月、京都府立大学地域貢献型特別研究として「地域文化遺産を活用するための調査・記録・情報化の研究－八幡市域を中心とした文化情報学研究の確立－」が採択された。此研究では、フィールドとして八幡地域が選定された。その後諸史料を検討した結果、八幡地域にとって重要な文書群であり、土蔵の中で現状が残されている木村家文書を重点的に調査することとなった。7月17日木村家の現地調査が開始された。府立大学東、教育委員会竹中・院生4名（稻吉・杉山・谷口・本田）で、土蔵内の現状記録と学習館への史料搬入をおこなった。7月29日、同じく東・竹中・院生5名（稻吉、齊藤、谷口、杉山、渡邊）で、整理方針を検討し、収納状況の記録、掃除をおこなった。そして8月18日～20日、先ほどのメンバーに加えて、府立大学の院生、学生約20名ほどで、文書の清掃とともに目録を作成し354点を整理することができた（図2）。その後、目録作成は、定期的に院生（稻吉、谷口、本田、杉山）によって実施され、現在も続いている。

この間、故木村富彦氏は何度も文書整理の現場に来られ、院生が目録作成で生じた質問などに丁寧に対応していただいた。これまでの経験から史料搬出後、所蔵者の方が文書整理の現場に頻繁に立ち会われることではなく、この点からみても希有な所蔵者であったといえる。木村家文書は、①八幡地域にとって重要な史料である、②近年激減した蔵出しから目録作成まで実施できる、③大変理解のある所蔵者であるという点で、今回の「地域文化遺産を活用するための調査・記録・情報化の研究」の対象として、ふさわしい史料といえる。

表紙解説

	1 2 3
5 (裏)	4 (表)

- 1 石清水八幡宮本殿楼門の内部
- 2 慶長5年5月25日「徳川家康朱印状」部分（木村家文書）
- 3 木村家の土蔵にて古文書を説明する故木村富彦氏
- 4 石清水八幡宮本殿楼門、背景に神紋
- 5 石清水八幡宮、鳩八幡宮・神紋

配色は、2009年3月「平成の大修造」により、鮮やかによみがえった石清水八幡宮本殿楼門の朱色を基準とした。

（写真提供 2, 3 八幡市教育委員会、1, 4, 5 石清水八幡宮）



京都府立大学文化遺産叢書 第3集

八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図

—地域文化遺産の情報化—

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）
竹中 友里代（八幡市ふるさと学習館主任学芸員）
発 行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2010年3月31日
印 刷 株式会社 春 日
〒630-8126 奈良市三条栄町9-18